正法眼藏の研究態度及び方法

神保如天

永平高祖の正法眼藏を研究するといふことは研究事業の中で最大難事業の一であると思ふ。古來未だ曾て之を成し遂げた人の無いのを見ても能く知れるのである。今後といへども恐らく一人にして之を完成することは出來ないであらう。それほど正法眼藏の研究は困難なのである。

正法眼藏が大成してから已に七百年、遠く詮慧、經豪二師を首めとし、越えて德川時代に至つて天桂、面山、萬仞、本光、藏海、老卵、黃泉等踵をついて出で、近く明治時代の月潭、光輪、穆山、孝道等の學者が輩出して其の研究は旺盛を極めた。其の著述だけでも百部に垂んとし卷數亦數百に及ぶであらう。中には一部の著にも十年二十年を費し、或は一生を眼藏に捧げたといふ程の學者もある。實に眼藏の研究史上に燦として光輝を放つてゐるものが多い。にも拘らず前にも言ふが如く古來一として未だ之を成し遂げられたものが無いといふことは、學者其の人の努力、熱の足らざるに基くのでは無くして、眼藏其のものが非常に難かしく研究の容易ならざることを示すものである。然ら意ば正法眼藏の非常に難かしいと謂はるゝ所以は何處にあるか。從來の學者が如何なる態度で正法眼藏を取扱つて來たか。この點に就いて少しく考察を試みよう。

眼藏の難解だと謂はるゝ點を擧ぐれば二三にして止まらない。形式的方面から云へば、文章の難かしいこと、語法が奇拔で特殊の表現法を用ゐてあることなどが其の一に數へられる。然し是等はさほど問題とするに足らない。文法も語法も何にも無い蕃人の書いたものでさへ讀める世の中である。況んや立派な日本文法に依つて文化人の書いた國文である眼藏が、いかに難かしいからとて懸命の努力さへ拂へば必ず理解されるに相違ない。次に內容的方面からいへば、著者の思想が餘りに豐富で、高尙で、深遠で、幽玄であるといふことが其の二である。例へば傳敎大師ならば法華中心、弘法大師ならば事相の密敎、法然親鸞兩聖人ならば淨土思想、日蓮上人ならば法華本門の敎義といふやうに目標が一定してゐる。故に其の思想が如何に高くとも深くとも其の中心を捉へることがさほど困難でない。道元禪師にあつては是れ等派生的な佛敎の敎相とは全く異り、佛法の本源、無差別にして純一なる根本をお述べになつてあるが故に、派生的な敎相にのみ慣らされ、敎判的の概念にのみ捉らはれてゐる者には、どうも佛法の根源を把握するといふことが實に困難である。然しこれも只理知的に論理的に理解するといふことだけで滿足するのならば必ずしも解決し得られぬ問題でも無いが、更に其の根柢に橫はる最も重大なる困難の理由が存する。それは道元禪師の宗敎的體驗、純粹經驗、直觀的悟境ともいふべきところのこの大信念、大悟徹底したる大人格を通じて純一無雜なる無上の正法が說かれてあることである。思想の豐富、高尙といひ、深遠、幽玄といふのも皆この大人格から涌き出たところのものである。この大人格から迸り出づる大思想を文字言語として表現せんとする時、尋常一樣の語法、文章を以つては到底成し得られぬ譯である。自然そこに逸格、卓拔、絕奇なる文字も語法も出で來らざるを得ないのである。要するに正法眼藏を研究するには、其の文章や思想やを究むる前に、道元禪師の大人格に觸れ佛法の根源を正確に握つて、而して後に其の思想、文章を解すべきである。然るを若し其の根本を後にして卒然として眼藏の文章文字のみよ

り先づ入らんとするならばその困難たるや壁立萬仞である。

次に從來の學者は如何なる態度を以つて此の眼藏に臨んだかといふに、前に陳べたやうな眼藏の難解なる所以を知つて深く考慮するところあつてか、いづれも皆參究的態度をとつてゐる。參究的態度とは私が研究的態度に區別せんが爲に名けた語である。古來宗門には實參實究といふ語がある。研究といふ文字は禪語にもあるにはあるが、こゝでは世間一般にいふ研究の意味に用ひておく。今參究的態度といふのは實踐的態度或は信仰的立場といつてもよからう。理知を主とせず體驗を主とし信仰を主とする。寧ろ理知的批判的態度を否定し、直觀的に宗教的體驗の中に浸らうとする態度である。今日謂ふところの學的態度とはやゝ緣遠いもので、何等の批判や組織や思索を許さない。只有るがまゝに一字一句を金言とし、聖語として之を信奉する。從つて其の字句の解釋は自然訓詁的となり、成語、熟語、傳記、因緣等の故事典據などを擧げて文々句々の意義を逐條解釋して後は、參學者それ自身に參究して看よといふのである。即ち其の歸結を必ず參學者の體驗と實踐とに求める。

從來の學者の著述、例へば經豪の御抄、天桂の辨註、面山の聞解、本光の參註、藏海の私記等の書は殆ど此の參究的態度を以つて書かれたものである。加之、明治大正昭和時代に至つても尙ほ未だ一人も其の節圍から跳出した者が無いといつてもよからう。而して參究的態度は最も正統的態度であり第一義であるかの如くに見做され、所謂禪は講ずべきものではなくして參ずべきものだといふ直觀至上主義が是認せられ、是が正法眼藏を研究する者の唯一の態度であるが如く目されてしまつた。

德川時代から一躍して明治時代に入るや、すべての文物が目にも止まらぬほど躍進振りを示した。往時の十年は百年に値ひするほどの飛躍である中に、正法眼藏の研究のみは十年一日の遲々たる牛步を續けて來たことは寧ろ奇蹟と

もいふべきであらう。然し斯う云つたからとて參究的態度其のものを私は非難するのでは無い。この態度は高祖の兒孫として其の正法眼藏に對して實參實究を主とするものなるが故に今後といへども寧ろ稱揚すべきではあるが、遺憾なことには、其の參究の方法が餘りにも同一傾向を辿り、時代と全く懸け離れて、同じ型にはまつて動きがとれず、いつまで經つても舊套を脱しやうともしないので、結局行き詰りとならざるを得ない運命にある。參究其のことは甚だ結構ではあるが只其の形式のみを固執して、研究といふことに何時までも眼を背けて居る時節ではないやうに思ふ。苟も昭和年代に出世したる學者、永平の兒孫を以つて自ら任ずる者は、此の古い殼から一度脱け出して時代に即應した新しい研究方法を取入れて、愈々正法眼藏の眞價を天下に高揚し、道元禪師の宗風を中外に闡明することが吾人に課せられた重大なる使命ではあるまいか。

研究的態度に就いて少しく考へて見度い。研究的態度といふのは正法眼藏を研究の對象として取扱ふことで即ち正法眼藏を學的に評價せんとするものである。或は又批判的研究法と名けても差支へないであらう。主知的に思想を整理し、組織的に論理を系統づけて學としての眞理性普遍性を止揚せんとするものである。そこに自づから價値批判も必要となり、學的の思索も必要となつて來るのである。其れが縱し主觀的立場をとるにしても合理的妥當性を發見せんとする努力を要し、又客觀的立場をとるにしても學理的合理性を究明せんとする檢討を要する。それには現代の進歩せる科學的研究方法を採用するもよからう。或は更に進んで哲學的研究方法を取入れることも許容せられねばなるまい。參究的態度は研究を否定する直觀至上主義であるから批判を許さない。これを正統的であり第一義的態度であるとするが故に其の參究の分野は局限せられて甚だ狹い。其の代り有らゆる宗乘の玄奥を究むる根本的の立場だからして深く其の玄底を極め高く其の頂上を究めようとする大目的を有つ。今の研究的態度は研究を是認する理性最上主

義であるから遠慮なく之に批判を加へる。これが合理的であり學理的である點から第二義的態度ともいふべく其の研究の分野は極めて甚だ廣い。或は禪學的の立場、教學的の立場、或は一般思想の對比、例へば哲學的に、倫理學的に、宗教學的に、美學的に、文學的に之を究明することも出來るであらう。而して其れらの學の思想內容の中に有つ眞理の輝きを以つて眼藏が有つ眞理を照らし最高價値をあらしめようとする目的を有つ。この態度は從來の古典的取扱ひや訓詁的解釋が割合に正統的であり祖述的であつたのに比して、或は時に異端的となるやうな危險性がないでもない。此の點は甚だ注意を要する。否、注意以上に警戒を必要とする場合があるかも知れない。德川時代の眼藏學者の中に於いて天桂和尙は比較的に研究的方法を採つた人である。殊に其の著辨註の中の面授、嗣書、授記の三卷に對する彼の議論は二十餘年間心血を注いで書いたものであつたが、其の說が天下に囂々たる輿論を捲起し、乙堂の續絃講議を首め、面山の闢邪訣、雪夜爐談、萬仞の諫蠹錄が出る、一方に定山の獅子一吼集、梅峰の洞門劇談、空印の迸驢乳、公音の天桂不知正法眼藏之由來事といふものまで出るに至つた。天桂和尙の說には無論獨斷もあり危險の說も多少あつたが、其の精神は護法愛宗に出で、高祖道の宣揚に資せんとしたものであつて、決して殊更に異端を主張せんとしたものでは無かつた。それだのに邪疑者と罵られ滑稽和尙と嘲けられた。これを以つて見ても研究的方法といふものは時に斯うした危險性の有ることを警戒する必要がある。然しそれを懼れ怯へるには及ばないと思ふ。天桂和尙以後に出た學者が努めて正統的な參究的態度のみをとるに至つた原因の一つには、或は天桂和尙の前轍を履むまいとする恐怖心が餘程手傳つてゐたのでは有るまいかと思ふ。時代の影響も無論有つたに違い無いが、どうも學者のいづれもが自分の主張したいことを强て押へて何でも否應なしに古人の說に從ふといふやうな傾向の見えるのは、慥かに學問の進步を阻害した一つの原因であつたと考へる。老卵和尙の那一寶の如きは好き例である。これは學問の爲には

甚だ遺憾なことである。明治時代になつてもまだ其の情勢の爲か、何かゞ研究の進路を阻んでゐるやうな感じがないでも無い。

大正の末年頃から近年に至つて道元禪師及び其の正法眼藏が世の學者に取上げられて學界にポツカリ浮び出たやうな感がある。先づ和辻哲郎博士が日本精神史研究に沙門道元を書いて大正十五年に岩波書店から出版した。それから一高教授の佐藤得二氏が佛教の日本的展開に道元禪師一篇を書いて昭和十一年に岩波から出した。翌昭和十二年には彦根高商教授の秋山範二氏が道元の研究といふ大著を出版して道元の哲學を究明せられた。紀平博士の道元と日本の禪、橋田一高校長の正法眼藏の側面觀、正法眼藏と科學者、秋山教授の禪の哲學的意義、田邊元教授の日本哲學の先蹤等が學界の雜誌を賑はし、終に本年六月田邊元博士は正法眼藏の哲學私觀を岩波から出版されるに至つた。これに依つて道元禪師及び其の正法眼藏が哲學者及び哲學思想の書として現代に持て囃される事になつた譯である。これらの學者は皆宗門と無關係の人ばかりで、世に謂ふが如き御用學者とは全く譯が違ふ。純然たる學者であつて、それが曹洞宗の高祖であることや、永平寺の開山である事などは全然問ふところなく、日本の產んだ歷史人としての道元、その道元の有つ思想を對象としての研究であつて實に自由の立場にある人の言論である。故にそれが宗門に惡しく影響しようが善く影響しやうが其れらの學者の毫も關知せざるところである。それでこそ眞の研究的態度を堅持することが出來るのである。永平の兒孫といはるゝ宗門人に果して此の自由さを以つて研究的態度が保障されるであらうか。假に許されるとしたならばどこまでも研究的態度一本槍で進んでよいであらうか。或はそれで宗門人としての使命を全ふし得るであらうか。こゝは一つ大いに考へて見ねばならぬところだと思ふ。

世間の學者、謂ゆる門外漢の研究は如何なる立場で爲されやうとも全く自由である。學的良心を以つて爲される限

り宗門にどんな影響があらうとも毫も關するところでない。又宗門に於ける傳統的の解釋がどうあらうと、道元禪師の家風或は宗風がどうあらうと、其うしたことに少しもこだはりを持つ必要は無い。假りに一學者の發表が宗門の消長に關するやうなことがあつたとしても其の學者には何も責任はない。自分の學的良心にさへ疚しいところがないならば、曹洞宗が興きやうが倒れやうが一向與かり知るところでない。故に若し宗門で困つたことだと思ふやうなことがあつたとしても之に抗議を申込む權利も無く、學者は之に答ふる責任も無い。況して其の說を是正するなどゝいふことは望まれないのである。幸ひに吾が宗門には斯うした憂ふべき傾向は少しもない。寧ろ高祖道の宣揚に自づから役立つてさへゐる。東京帝大教授で一高校長の橋田邦彥先生の如きは自から自然科學者であり生理學を專門としてゐる者だといはれてゐるが。聞くところに依れば其の研究室には常に香を燒いて正法眼藏を拜覽しておいでになるといふことである。私自身の有つて居る生理學は眼藏なしには確立しないといふことを確信して居るといふ立場に在つて、極めて敬虔な態度で學徒の爲に科學者としての眼藏を讀み且つ講じて居られるといふことである。橋田博士御自身には宗門の爲でも何でも無く學問の爲の眼藏研究であるが、宗門から觀て嬉しいことであつて感謝したいやうな氣持さへするのである。正法眼藏釋意といふ著述が何卷か逐次刊行せられるといふことであるが、宗門人は必ずや之に深き關心と好意とを寄せることゝ思ふ。秋山教授、田邊博士等の著に依つて日本哲學の先蹤として道元、及び其の正法眼藏が颯爽として哲學界に躍り出で學界の寵兒として持囃されるに至るや、學者たると否とを問はず、苟も宗門人たる者は少からず愉快を感じ一種の誇をさへ感じたであらう。それが亦自然に宗門に寄與したところも尠くないであらう。然し此所に大いに注意すべき點がある。學界の權威者が、或は科學的に、或は哲學的に、道元禪師の思想や正法眼藏を研究して世に發表されたからとて、これで宗門が興隆するとか、高祖の宗風が宣揚せられるとかいふ風に考

ふるならば大なる誤りである。言ふまでもないことだが、道元禪師は釋尊と同じく大宗教家である。その宗教が餘りに深遠であり幽玄であり高尚であるところからして、哲學者としても見られ科學者としても見られ藝術家としても見られるであらう。それは道元禪師の宗教を夫々の角度から見た其の面にしか過ぎない。釋尊がソクラテースでもなくアリストテレスでも無いと同じやうに道元禪師もカントでもヘーゲルでも無い。どこまでも大宗教家、佛祖正傳第五十一代の祖師、我が日本曹洞宗の高祖道元禪師であつて、宗門人とは此の道元禪師の宗風に慕ひ寄れる弟子門人で、道元禪師を中心とした信仰團體を曹洞宗といふので、即ち一の宗教團體であり信仰團體である。門外の人が一個人としての道元の思想を批判するのと、門内の者が高祖道元禪師を敬慕し信仰するのとは根本に於いて其の觀方が異つてゐる。金子白夢氏は三十餘年前から道元研究をやつてゐる人である。其の人は名古屋で基督教の牧師を勤めてゐる。正眞正銘の異教徒であつて決して佛教信者でも無く道元信者でも無い。體驗の宗教といふ著述の中に道元の宗教の一篇がある。昭和二年に新生堂から刊行された。その他にも道元に關する著書或は論文が幾つもあつたやうに思ふ。金子氏は道元の宗教を批判し其の思想を研究するところの篤學者である。學者の立場に於ては佛教徒がクリストを研究し、基督教徒が釋迦を研究してもそれは自由であつて信ずるといふことゝ研究とは全然別問題であるからである。永平の兒孫たる宗門人の正法眼藏研究が斯うした態度で爲されて好いかどうかといふ問題は自からこゝに解決を與へてゐるのではあるまいか。

然らば今後宗門人たる學徒は如何なる態度方法で正法眼藏の研究をしたらばよいかといふ問題になるが、私としても大した名案を持ち合はせてゐない。こゝに愚案の二三を列擧して諸君の參考に供したい。

一、純參究的態度。　參究的態度のことは前に既に述べたが、此に純といつたのはその參究方法も參究的態度に應

ずる意味である。即ち參究的態度をとるばかりでなく其の方法もすべて參究的の行き方をすることである。例へば大本山永平寺で行はるゝ眼藏會の如きはこの態度方法に依る最も模範的なものであると思ふ。勿論其の提唱は訓詁的解釋であり、故事典故等を擧けて字句並に文相の通釋を施されるに過ぎないであらうが、然し其の提唱の中に高祖の全精神を躍動し、學人をして高祖の家風に浸らしめ、直ちに之を坐禪の實踐にうつして體驗し直觀せしめ、更に日常生活の四威儀に之を現成せしめやうとするが參究的態度であり又方法である。從來の眼藏家といはるゝ人は殆んど皆此の純參究的態度を採つて來たといつてもよからう。そこで其の提唱する師家の人格、修行力といふものが大なる意義を有つことになる。即ち其の人の高祖道を體驗してゐる程度がそのまゝ其の提唱に反映し來るが故に、學力や辯舌が如何に優れてゐても、人格が低く修行力が未熟であつては本當に高祖道が滲み出て來ない。從つてそれだけ相手に及ぼす感化力も教化力もない譯である。一言にいへば眼藏の提唱は文字や言句でなくて人格であり道力である。西有穆山禪師が入滅せらるゝや穆山逝いて眼藏滅ぶといはれたのは即ち其の意味である。この穆山禪師の如きお方を目標として眼藏を究めやうとするのが純參究的態度である。

二、參究的態度に於いて研究的方法を採るもの。　參究的態度は宗門人として望ましいことだが餘りに舊弊であり姑息である。個人としての體驗修行としてはそれでもよいであらうが、自分にも知的要求を滿たしたい。又廣く世の人の理性に訴へて之を普及せんとするには研究的方法を採用して學的に研究するのが現代的である。參究的態度と研究的方法とは決して兩立しないものではあるまい。參究的態度を歪めないやうにしながら適當に研究的方法を必ず採用し得ると思ふ。今具體的方法に就いての說明は省略しておく。

三、純研究的態度。　研究的態度のことも前に已に述べておいたが、今此に純といつたのは其の態度も研究的であ

り其の方法も研究的であるといふ意味である。然らば門外漢といはるゝ世間の學者の研究態度と全く同じであるかといふに然りともいへるし然らずともいへる。然りといふのは研究的態度といふ點は全く同じであるからである。然らずといふのは、世間の學者は研究の爲の研究であるから其の研究が宗門に如何なる影響を及ぼさうともその學者には何等の責任を有たない。それに反じて宗門人――永平の兒孫、少くとも曹洞宗に僧籍を有し、宗門に衣食する學者――には自分の研究が宗門に對する利害に無關心ではあり得ない。其の及ぼす影響に就いて必ず大なる責任を帶ぶべきものである。言ひ換へればその研究が宗門の興隆、高祖道の宣揚に寄與するもので無くてはならぬ。此の點が世間の學者に比べて自由さが幾分狹められてゐるのである。若しもそのやうな制約を受けることを欲しない、眞に自由の立場に於いて研究がしたいといふならば宗門の定むるところに從つて責任を負ふか、然らずんは宗門外に出てしまふかの二途の一を選ばねならぬ。然し宗門の學者として立つ人には是れ位の覺悟を誰しも有つてゐることゝ思ふ。實際は純研究的態度の學者が續々勇敢に出て欲しいのである。今のところ門外の人に先鞭を着けられて逆に禮讃してゐるやうな形である。門外人の發表を以つて自分の宗門の味方或は信徒でも出來たやうに心得たり、その人等に教へをうける積りでゐたりするならばそれは大いなる誤りである。寧ろ宗門の學者は彼等を教へ導きて學的に信徒にするだけの意氣ごみを有たねばならぬ。これは然し仲々容易のことではない。實際の素要實力が無くては出來ぬことで謂ふところの空權識では誤間化せぬ仕事である。宗門には實際學者に乏しい、學者の續出を待望して止まない。

大凡そ以上の三で研究の態度方法は盡きると思ふ。第一の純參究的態度は第一義的で第三の純研究的態度は第二義的である。而して前者は志しのある者即ち道心の士でさへあれば利鈍を分たず實參實究し得るが、後者は俊敏利發の英才で無くては能はざるところである。若しその力無くして研究的態度をとつて見ても無益である。第二の參究的態

度をとりつゝ研究的方法を用ひる。これが從來の宗門學者が採り來つた一つの行方であらうと思ふ。それが人に依つては第一と全く同一になつてしまつた人もあるであらう。それはその個性或は素養に依つて違つて來る。例へば同じ西有門下でも秋野禪師は第一、丘老師は第二の態度であつたやうに思ふ。これはその人の最も得意の方に向つて進むのであつて、それが一番好いからである。

次に研究の部門、研究すべき問題等に就いても語りたいと思つたが餘り長くなるからそれは他日に讓ることにする。大體以上を以つて從來の眼藏學者のとり來つた研究態度並に方法等を參照して今後宗門學者の進むべき方向の一端を指示した積りである。どの態度どの方法でもよろしいから宗門人のすべてが、深く道元禪師の佛法を知り、正法眼藏の精神を究めて欲しいものである。それが參究的態度であらうと研究的態度であらうと、敢へてえらぶところが無いと思ふ。純參究的態度は私の最も望むところではあるが純研究的態度も亦決して拒否するものではない。況してその方法は如何なる形式に依らうとも一向差支への無いことである。只一つ注意すべきことは宗門人は如何なる態度、如何なる方法に依つて研究しようとも宗門人たる意識を明確にして我れらの高祖、我れらの正法眼藏なりといふ尊敬と信仰とを失はないことである。しつかりと此の立場に立つて、有らゆる方面、有らゆる角度から正法眼藏の研究があつて欲しいのである。從來のやうな一つの型に捉らはれる必要は毛頭無い、どん〳〵新らしい方面を開拓して現代の文化に即應すべきである。これが現代に活きる新人の任務でなくてはならぬ。（昭和一四、一二、二〇）